

## 動詞にもとづくイタリア語の文型について

橋本 勝雄

〈Sommario〉

Per gli studenti giapponesi l'italiano può essere una lingua relativamente facile da ascoltare e da parlare ma difficilissima da leggere. Non basta imparare le coniugazioni dei verbi per saper leggere un testo scritto in italiano. Bisogna stare attenti alle strutture sintattiche e semantiche della frase. Naturalmente ci vogliono tanta pazienza e il lungo periodo di allenamento e soprattutto una solida conoscenza di base sulla grammatica di frase. Per facilitare la comprensione testuale qui si propone una visione globale delle frasi-tipo della lingua italiana. Cominciando dalla classificazione dei verbi secondo la valenza, si cerca di analizzare le caratteristiche di frasi nucleari.

In concreto, si dividono le frasi italiane in cinque classi: 1) Frasi impersonali, 2) Frasi transitive, 3) Frasi inergative, 4) Frasi inaccusative, 5) Frasi con essere.

È importante notare non solo la simmetria tra le inergative e le inaccusative rispetto alle transitive, ma anche la ragione della scelta degli ausiliari (essere / avere) nei tempi composti. Così si può cogliere il rapporto tra la agentività e la telicità degli eventi descritti dalla frase.

Oltre alla tipologia della frase, questo progetto mira a svipullarsi verso la chiarificazione delle relazioni tra le proposizioni e anche tra le frasi nel testo.

### 1. 初めに

本研究ノートは、イタリア語の文章を読み解くための補助として、基本文型の特定からテキスト内の関連性の分析にいたる一連の研究の最初の段階にあたる。最終的な目標は、イタリア語の複雑なテキストを読解するうえで有効な知識と考え方を総合的に提示することである。本稿ではその基盤として、従属節を含まない単文からさらに核となる部分だけを抽出した「核文」概念を援用した基本文型の可能性を考察する。

はじめに、2章においてイタリア語学習における文章理解の困難さと基礎文型の重要性を考察する。3章では、言語学における動詞項の概念と非対格仮説の仮説を利用して、5種類の基本文型を区別する。4章ではジャンニ・ロダーリの寓話「アリーチェ、海に落ちる」をテキストとして分析を行い、こうした基礎文型を土台としてどのような応用が可能であり、またどのような点を補足する必要があるかを考える。

## 2. イタリア語学習における2つの課題

### 2.1. 複雑な動詞活用

日本人学習者から見ると、イタリア語は発音や聞き取りの点では比較的容易であるが、語尾変化の複雑さが障壁となることがおおい。

たしかに音韻論的にはイタリア語は日本人にとって比較的学びやすい。母音が日本語の母音に近く、子音連続を避ける傾向があり、母音で終わる開音節が多い。二重子音と促音、強勢母音と長音がほぼ対応していることもあって、カタカナ表記による発音でも通じるという印象がある。

またイタリア語は発音の揺れに「寛容」である。それは歴史言語学的にも説明ができる。本来書きことばであったイタリア語が話し言葉として全国的に定着するのは20世紀後半になってからであり、現在でも母語である各地域語の影響が強く残っている。ジンガレリやガルザンティのような一般の国語辞典には、IPA発音記号を用いた表記は見られない(外来語や一部の特殊な語形を除く)。主に表記されるのは、強勢の位置、音節の区切り、開口母音と閉口母音(e, o)、さらにs, zの清音/濁音の指示である。

その一方で、イタリア語を学ぶうえで大きな困難となるのが、語尾変化する単語(名詞、冠詞、形容詞、動詞)、なかでも動詞活用の複雑さである。

名詞および冠詞、形容詞は、男性/女性、単数/複数のカテゴリーに応じて最大4つの語形変化をする(il bambino italiano - la bambina italiana - i bambini italiani - le bambine italiane)。動詞の場合、法、時制、人称に応じて、きわめて多数の変化形を示すことになる。

動詞 *amare* 「愛する」を例に挙げよう。直説法で48(8つの時制)、接続法で24(4つの時制)、条件法で12(2つの時制)、命令法で5(1人称単数がないため)、不定法で6、合計して95となる。他動詞の場合、能動態に加えて受動態も考慮すると、ひとつの動詞について、200近い「変化形」を目にすることになる<sup>1)</sup>。

もちろん、そのすべての活用変化を覚える必要があるわけではない。およそ半分は助動詞 *avere* / *essere* と過去分詞の組み合わせによる「複合時制」であるため、推測可能である。また使用頻度の少ない時制(たとえば先立過去)、他の時制で代用可能な時制(遠過去と近過去、または未来形と現在形)を考慮すると、実際に「覚えるべき」動詞変化の数はそれほどでもない。

しかし、英語のように動詞があまり人称変をしない言語と比較してみれば、イタリア語学習者の努力のほとんどが、これらの動詞活用を覚えることに費やされるのは当然である。

したがって、イタリア語学習・教育においては、名詞・形容詞の性数、動詞の時制・態・法・人称による語形変化への比重が大きい。こうして「聞く、話す」作業を通じて動詞活用を習得することで日常会話をこなせるようになる。

### 2.2. テキスト読解

しかし次の段階で生じるのが、テキスト読解の問題である。一般にイタリア語学習の2年目以

降, いわゆる中級レベルに進むにあたって, 物語や評論などのテキストを読むことになる。これは高度な情報を得るためにも, 次の段階となる「書く」行為に続くためにも重要であるが, ここで二度目の困難に直面することが多い。

それは, 話しことばと書きことばのシンタクスの差という問題だけではない。初級イタリア語における「文法」では, 動詞の語尾活用を中心とした練習問題に比重が置かれ, 文がどのような要素から構成されるのか, どのような構造があるのかという事柄についてあまり触れられてこなかったからである。たとえば複合時制における補助動詞 *avere / essere* の選択や, 再帰動詞や代名動詞についても, 個々の語彙がもつ特徴としてとらえられるだけで, 文全体における関係についてはあまり考察されることがない。

統語論に対する形態論の優先とも言えるこの状況には, 日本におけるイタリア語の学習環境が関係する。日本におけるイタリア語学習者の大半には英語を学んだ経験があり, イタリア語を含む西ヨーロッパ言語(印欧語族に属する)を学ぶ際には, 英語の知識が土台となる。名詞, 動詞, 形容詞といった品詞分類に始まり, 過去や未来, 完了という動詞の時制, アスペクト, 人称, さらに主語, 目的語, 補語などの文法概念は英語学習を通じて獲得される。第二外国語であるイタリア語は, 英語との類似と差異をつうじて学ばれる。

### 2.3. イタリア語の統語的特徴—主語

したがって英語の動詞に比較して複雑なイタリア語の動詞変化に重点が置かれる一方で, 文の構造についてはそれほど重視されない。

もちろん日本語のようなまったく異なる言語から見れば, イタリア語と英語の統語的な共通点が目につくのは当然である。しかし, 統語論的に見た場合, 英語とイタリア語には無視できない大きな違いがある。ここで主語の特性についてみてみよう。

同じ SVO 型言語に属しているが, イタリア語の語順は英語に比べてはるかに自由度が高く, 主語と動詞句の位置関係が固定されていないように見える。Salvi-Vanelli [39] は, 動詞の前に主語が位置しないケースとして, 以下の3つのケースを想定する。

i) 主語が文中の別の場所に位置している。

(1)  $\emptyset$  sono venuti studenti a chiedere informazioni.

「学生が情報を求めに来た」

(2)  $\emptyset$  me l'ha detto Giovanni.

「ジョヴァンニが私にそれを言った」

(3) a. Giovanni, i giornali,  $\emptyset$  non li ha comprati.

「ジョヴァンニは新聞を買わなかった」

b.  $\emptyset$  ti ha dato un anello, Giovanni.

「ジョヴァンニが君に指輪を渡した」

動詞の左側にある主語の位置が空になり（記号 Ø），その主語は，動詞の右側（1），動詞句の後ろ（2）に位置する。（3）では，主語ジョヴァンニが左方移動（a），右方移動（b）をしている。

ii) 主語が存在しない動詞および構文。

(4) Ø piove.

「雨が降る」

(5) a. Ø si tratta di te.

「君が重要だ」

b. Oggi Ø fa brutto.

「今日は天気が悪い」

c. A Piero Ø non importa di nessuno.

「ピエロは誰のことも気にしない」

(6) a. Qui Ø si dorme bene.

「ここではよく眠れる」

b. Ieri Ø si parlava di Maria.

「昨日はマリーアについて話をした」

気象を表現する非人称動詞には主語が存在しない（4）（5b）。意味的に存在していてもそれが名詞句ではなく，前置詞句で表現されるために主語とみなされないものもある（5a, 5c）。さらに非人称構文では「一般に（人が）」という主語が想定されるが，表示されることはない。

iii) 主語は表現されていないが，人称活用や発話の文脈から特定される。

(7) a. Arriverò domani.

「私は明日到着するだろう」

b. Arriveranno domani.

「彼らは明日到着するだろう」

(7a) では一人称単数の主語が動詞活用によって特定される。(7b) ではやはり動詞活用によって主語が三人称複数であることが示され，その指示対象は文脈から判断できる。

この点で，英語との違いはより明確になる。主語の表示が義務的である英語では主格代名詞が頻繁に登場するが，イタリア語においてはそうではない。

(8) - (Tu) Conosci quel signore?

「君はあの男性を知っているか？」

- Sì, (io) lo conosco. (lui) è il fratello di Carlo.

「ええ、知っている。彼はカルロの兄だ」

通常は、省略不可能である目的語人称代名詞（例文（8）の *lo*）とは対照的に、主語代名詞は省略される（*io, tu, lui*）ことが多い。それが明示されるのは他との対比のためや、人称変化が同形となる接続法現在形の主語を明示するためである [Enc.: 640]。

(9) *Io penso che tu abbia torto.*

「(他の人が思うのとは違って,) 私は君が間違っていると思う」

(10) *Lo faccio io, questo lavoro.*

「(君や、他の人ではなく), 私がこの仕事をしよう」

したがって英語における形式主語の *it* に相当する、冗語の主語がイタリア語には存在しない。この点は、非人称構文一般を考察する場合に重要になってくる。

(11) a.  $\emptyset$  / \**Esso piove.* (例 4 と同じ)

「雨が降る」

b. *It rains.*

主語のこうした統語的特性を考慮すると、「主語－動詞」の表示が固定化している英語に比べ、イタリア語における文の構造の決定が難しいことは想像できる。しかしテキストを読むためには、定形動詞の主語が動詞の前でないときに、主語が文中の別の場所にあるのか、省略されているのか、あるいは存在しないのかを即座に判断する必要がある。

イタリア語の文構造の特徴を表した基礎的なパターンとしての「文型」は、そうした判断を助けとなるはずである。もちろん個々の正確な判断は、長い経験を通じて得られるものであり、形式的なパターンに還元できるものではない。ただし、一見して多種多様にみえる文がいくつかのまとまりに大別できると知ることで、理解が容易になるだろう。

日本における従来のイタリア語文法書では、動詞の性質（他動詞、自動詞、再帰動詞など）や、特殊な構文（非人称、受動態など）に対する説明はあっても、基礎的文型を取り上げたものはほとんど見当たらない。そこで、本稿では、イタリア語の特徴をとらえた基本的なモデルとしての「文型」を考察する。

### 3. イタリア語における文型モデル

#### 3.1. 項による動詞分類

伝統的な学校文法において、文は「主語－述部動詞」(soggetto - predicato) からなる形式で記述されてきたが、20世紀後半 Tesnière [1959] による動詞の「結合価」valenza の概念の導入によって、動詞を中心に文が構成されるという考えが登場する。

それによれば、動詞が表現する事態に関わる参与者を〈項〉として規定し、それぞれに適切な意味役割を与えるとされる。文として成立するために必要な項の数によって、動詞の分類が可能となり、項を必要としない0項動詞 (piovere 「雨が降る」) から、3つを必要とする3項動詞まで分類される。以下は、Ježek [2005: 111] の図である。

動詞のクラス	例
0項動詞：piovere	‘Questa notte piove’ 「今晚雨が降る」
1項動詞：nascere, tossire	‘è nata <u>una bambina</u> ’; ‘Luca <sub>1</sub> ha tossito molto’ 「赤ん坊が生まれた」 「ルカはひどい咳をした」
2項動詞：noleggiare, abitare	‘Luca <sub>1</sub> ha noleggiato <u>una macchina</u> ’; Luca <sub>1</sub> abita a Roma <sub>2</sub> ’ 「ルカは車を借りた」 「ルカはローマに住んでいる」
3項動詞：dedicare	‘Luca <sub>1</sub> ha dedicato <u>un libro</u> <sub>2</sub> <u>alla madre</u> <sub>3</sub> ’ 「ルカは本を母親に捧げた」

イタリア語の「文型」モデルのてがかりになるのは、こうした動詞とその項からなる「核文」であろう。

項による分類が有効なのは、主語をもたない動詞（構文）を他の動詞と同じように扱うことができ、直接目的語／間接目的語（前置詞の有無）の区別を無視できるという点である。また、従来のイタリア語文法では、述部動詞に対して、主語とそれ以外のさまざまな意味の「補語」complementi が区別され、たくさんの種類の補語が列挙されてしまうが、ここでは、項に属さない（文の成立に影響を与えない）要素は核外要素として区別される。

この項概念には、いくつかの問題が残されている。ひとつは、trasferire 「運ぶ」や tradurre 「翻訳する」のような4項動詞を認めるかどうかである。さらに項と非項とを区別する基準が明確でなく、文脈によって表示されなくても文が成立する項があることも指摘されている [Ježek: 113]。

essere + 名詞句／形容詞からなる文について、「essere + 名詞／形容詞句」を動詞部とみなす研究者と、項の概念は述定動詞 verbi predicativi に限定し、コンピュータである essere を用いた文は別に扱う研究者がいる<sup>2)</sup>。さらには、通常、項である要素は、名詞句（主語または直接目的語）

と前置詞句（間接目的語）であるが、comportarsi bene のように副詞を項として要求する動詞もあれば、意味によって項が変化する動詞もある。

とはいえ、動詞を使いこなすうえでも、文において不可欠な要素と付加的な要素を見極めるためにも、項を意識することが有益である。そして、それぞれの項がどのような統語的表現で現れるのか（直接目的語か、間接目的語なのか、どの前置詞をとるのか）をそこに含めるならば、より具体的なパターンを把握できることになる。

### 3.2. 自動詞の2つのタイプ：能格動詞と非対格動詞

すでに橋本 [2011] で示したように、イタリア語の自動詞は2つのタイプに分類できる。助動詞に avere を選択する「非能格動詞」<sup>3)</sup> と、essere を選択する「非対格動詞」である。

両者の違いは、助動詞の選択だけでなく、部分の ne による代名詞化 (12)、絶対用法 (13)、過去分詞の修飾用法 (14) に現れる。(例 12-15 は [Enc.: 640])

- (12) a. arrivano molte lettere. → di lettere, ne arrivano molti.  
 「多数の手紙が届く」 「手紙は、その多数が届く」
- b. molti bambini dormono → \*di bambini, ne dormono molti  
 「多数の子供が寝る」 「子供は、その多数が眠る」
- c. abbiamo visto molti film → di film, ne abbiamo visti molti  
 「我々は多数の映画を見た」 「映画は、我々はその多数を見た」
- (13) a. arrivato Luca, ...  
 「ルカが到着して…」
- b. \*dormito il bambino, ...  
 「その子供が眠って…」
- c. preparata la cena, ...  
 「夕食が準備されて…」
- (14) a. il treno arrivato (poco fa)  
 「(さきほど) 到着した列車」
- b. \*il bambino dormito (qui)  
 「(ここで眠った) 子供」
- c. il quadro rubato (recentemente)  
 「最近盗まれた絵画」

いずれの例でも、非対格動詞とその主語 (a) の関係が、他動詞とその目的語 (c) の関係に類似していることがわかる。

さらに重要なのは、焦点をもたない無標の文において、非対格動詞の主語は動詞に後置される

傾向があることである [Enc.: 640]。

- |                                |             |
|--------------------------------|-------------|
| (15) a. sono arrivati i libri. | 「本が届いた」     |
| b. sono partiti tutti.         | 「全員が出発した」   |
| c. è morto il bisnonno         | 「曾祖父が亡くなった」 |
| d. *hanno dormito i bambini    | 「子供たちが眠った」  |

こうしたことから、2項動詞である他動詞の文から、その主語Sまたは直接目的語Oを消去した構造として、非能格動詞と非対格動詞の文を考えることができる。

- |               |         |
|---------------|---------|
| (16) a. S-V-O | (他動詞)   |
| b. S-V        | (非能格動詞) |
| c. V-S        | (非対格動詞) |

意味役割の点から見ても、前者の主語が他動詞の主語と共有する性質（動作主性）をもつのに対して、後者の主語は他動詞の目的語と共通する性質（被動者性）をもつ。

さらには、描写された事態の動詞行為（アスペクト）が、影響していることにも注目すべきである。[Enc.: 641]

- |   |                |
|---|----------------|
| (17) a. Luca ha corso nel parco per un'ora. |                |
|   | 「ルカは公園で一時間走った」 |
| b. Luca è corso a casa.                     |                |
|   | 「ルカは家まで走った」    |

(17a) が主語による活動であり、プロセスであるのに対して、(17b) は、終点が存在する状態の変化であるとされる。

### 3.3. 文型のモデル

本稿では、3.1. および 3.2 で検討された、項による分類と、自動詞の能格／非対格を合わせ、以下のように5つの文型を提示す。

文 型	構 造	補助動詞
1. 非人称	V	AVERE / ESSERE
2. 他動詞	SN <sub>1</sub> -V-SN <sub>2</sub> (-prep-SN <sub>3</sub> )	AVERE
3. 非能格	SN <sub>1</sub> -V (-prep-SN <sub>2</sub> ) (-prep-SN <sub>3</sub> )	AVERE
4. 非対格	V-SN <sub>1</sub> - (-prep-SN <sub>2</sub> ) (-prep-SN <sub>3</sub> )	ESSERE
5. essere 文	SN <sub>1</sub> essere SN / SA	ESSERE

SN = 名詞句, V = 動詞, prep = 前置詞, SA = 形容詞句

この区分は、『古イタリア語文法』で示されている核文の分類表を簡略化したものである [GIA: 82]。GIA では、非対格動詞の下位区分として単純形 (cadere 「落ちる」, morire 「死ぬ」) と、再帰代名詞を伴う代名動詞形 (pentirsi 「後悔する」, rompersi 「壊れる」) を設けている。

本稿でここに代名動詞を組み入れないのは、再帰形の動詞の一部はたしかに非対格動詞であるが、直接目的語を伴う再帰動詞、相互的な再帰動詞は非対格動詞ではないと考えられるからである<sup>4)</sup>。再帰代名詞を伴う動詞の扱いについては、稿を改めて考察することにする。

ここで改めて、文型 1 から 5 について簡単に触れておく。

1 「非人称」は、すでに述べたように、主語をもたない気象動詞が分類されるが、実際には、主語節が動詞に後置された構文 (18a, b) や、受け身の si 構文において目的節がある構文 (18c) もこの文型と考えることができる。

- (18) a. È urgente intervenire.  
「介入しなければならない」  
b. Bisogna che tu intervenga.  
「君が介入することが必要だ」  
c. Si dice che Andrea sia partito.  
「アンドレアは出発したと言われている」

他の文型では主語に応じて人称変化が可能であるのに対して、この文型での動詞は 3 人称単数でしか使われない。

2 「他動詞」は、2 つの名詞句が主語と直接目的語として表現される 2 項動詞である。場合によっては、間接目的語が加わって 3 項動詞となる。次の 3 「非能格動詞」と比較した場合に、どちらも 2 項動詞であれば、両者の違いは前置詞があるか、ないかという違いだけである。

- (19) a. Luca ha chiamato Maria.  
「ルカはマリーアを呼んだ (に電話した)」  
b. Mario ha telefonato a Maria.

「マリオはマリーアに電話した」

その意味で、3「非能格」は、通常同じ「自動詞」と分類される4「非対格」よりも、他動詞に近いと言える。

また、2「他動詞」の目的語が略される絶対用法の場合も、1項動詞として3「非能格」と似ている(20-22)。逆に3「非能格」は、内在的目的語をもち2「他動詞」に似てくることがある。こうしたことは4「非対格」では起きないと予想される。

(20) a. Luca ha parcheggiato la macchina.

「ルカは車を停めた」

b. Luca ha parcheggiato.

「ルカは駐車した」

(21) a. Luca ha bevuto il vino.

「ルカはワインを飲んだ」

b. Luca ha bevuto.

「ルカは(酒を)飲んだ」

(22) a. Luca ha camminato.

「ルカは歩いた」

b. Luca ha russato.

「ルカは鼾をかいた」

(23) a. Piero ha dormito sonni tranquilli.

「ピエロはすやすやと眠った」

b. Piero ha vissuto una vita serena.

「ピエロは穏やかな人生を過ごした」

4「非対格」の主語は、すでに見たように、他動詞の目的語と似た性質をもっている。Salvi-Vanelliは、非対格構文は、非対格動詞だけでなく、受動態文、受け身のsi構文でも作られるとしている。(24)は受動態、(24b)は受け身si構文の例である [Salvi-Vanelli: 58]。

(24) a. Sono stati invitati molti attori. / Ne sono stati invitati molti.

「大勢の俳優が招待された／大勢が招待された」

b. Si sono fatte molte spese inutili. / Se ne sono fatte molte.

「多くの無駄な出費がなされた／多くがなされた」

イタリア語の文の多くで、主語が動詞に後置される理由のひとつは、トピックやフォーカスの

ための移動だけでなく、こうした非対格構文によるためだと考えられる。

あくまで主語－動詞－目的語の語順を残したまま、動作主主語が消去されて、目的語の位置にある対象が「形式的に」主語に昇格して動詞と人称一致を行う。こうした関連性は、能動態と中間態の対を考えるとよくわかるだろう。他動詞 *guarire* 「(医者<sup>が</sup>) (患者) を治す」(25a) に対して、中間態動詞 *guarire* 「(患者<sup>が</sup>) 治る」(25b) がその一例である [Salvi-Vanelli: 58]。

(25) a. *Il medio ha guarito molti malati*

「医者<sup>は</sup>はたくさんの患者<sup>を</sup>を治した」

b. *Sono guariti molti malati / Ne sono guariti molti*

「たくさんの患者<sup>が</sup>が治った」

さらには、他動詞に、再帰代名詞を伴う中間態が対応する場合も多い (*alzare* 「起こす」-*alzarsi* 「起きる」) が、すでに述べたように、再帰形については改めて検討することにする。

また *essere* 文についても、再帰形動詞と合わせて、動詞に何らかの要素が付け加わってひとつの動詞部を構成する複合動詞 *verbi composti* の問題として、まとめて扱うほうがよいだろう<sup>5)</sup>。

#### 4. テキストでの実践例

##### 4.1. ロダリー「アリーチェ、海に落ちる」

3で、動詞の性質にもとづいて5つの基本的な文型を分類した。ここでは具体的なテキストとしてジャンニ・ロダリーの短編「アリーチェ、海に落ちる」[Rodari: 66-69] を取り上げて、こうした分類がどの程度有効であるか、さらに補足すべき点を考える。

まず1「非人称」として分類できるのは、以下の4つの文である。

(26) a. *Tu sai come si fa a diventare un pesce?*

b. *Hai visto com'è facile?*

c. *Sarebbe stato bello restarci per sempre, vivere sul fondo del mare come le sirene d'una volta.*

d. *perchè era sabato.*

(26a) は非人称の *si* である。(26b, c) は、不定詞節 *diventare un pesce*, *restarci / vivere sul fondo del mare* が主語節として後置されている。

次に2「他動詞」なのは、以下の箇所である。(下線部が動詞、イタリックが直接目的語)

(27) a. - *Alice, esci dall'acqua, - la chiamava la mamma.*

- b. Ma scopriva soltanto *dei granelli di sabbia*,
- c. e incontrò un ragazzo che raccoglieva ricci e telline.
- d. Posò su uno scoglio *il fazzoletto con i ricci e le telline* e si tuffò in mare.
- e. un delfino che faceva le capriole tra le onde e lanciava allegri zampilli nell'aria.
- f. ma subito richiuse le valve, imprigionando Alice e tutti i suoi sogni.
- g. Puntando i piedi e le mani riuscì ad aprire la conchiglia abbastanza
- h. Alice non raccontò mai a nessuno quello che le era capitato.

(27e, h) が3項動詞である以外、すべて2項動詞である。

ほとんどの場合 (S) VO だが、(27a) では主語が動詞に後置されている。非能格動詞である *rispondere, domandare, pensare* が、直接話法のあとで動詞に主語が後置されているのと同じであると考えられる。

- (28) a. - Tu sai come si fa a diventare un pesce? - gli domandò Alice.
- b. - Ti faccio vedere subito -, rispose il ragazzo.
- c. «Eccomi di nuovo nei guai», pensò la bimba

本稿では取り上げなかった、目的語節がある。(それぞれ下線部が目的語節)

- (29) a. ...vedere se le crescevano le pinne, o almeno qualche squama d'argento.
- b. Tu sai come si fa a diventare un pesce?
- c. Hai visto com'è facile?
- d. desiderando ardentemente di diventare una stella marina

(29a-c) は、間接疑問文が動詞 *vedere, sapere, vedere* の目的節になっている。(29d) では、*desiderare* の目的語節は (前置詞) *di* + 不定詞であり、名詞句の場合には現れない前置詞 *di* が必要になる。

- (30) a. \**desiderando ardentemente diventare una stella marina*.
- b. *desiderando ardentemente la stella marina*

(31a, b) では、直接目的語に対してそれぞれ形容詞句 *solì*, 前置詞句 *a letto* が結びついており、どのように位置づけるか考える必要がある。

- (31) a. - Non posso lasciarli soli

b. la mamma, che la credeva ancora a letto

3 「非能格」はすでに挙げた (28) 以外では以下のものがある。

(34) a. Invece pensava:

b. Il delfino venne a giocare tra i piedi di Alice

c. e sorrise:

d. che stava sbadigliando

e. Alice sospirò.

4 「非対格」については、動詞に主語が前置 (35)、後置 (36)、無表示の (37) 場合にわけて考える。

(35) a. Una volta Alice Cascherina andò al mare

b. il ragazzo non tornava a galla.

c. Il delfino venne a giocare tra i piedi di Alice

d. il babbo, che proprio quella sera doveva arrivare dalla città

(36) a. fin che mi cresceranno le pinne

b. le crescevano le pinne,

c. Passa un minuto, ne passano due

d. Al suo posto riemerse il ragazzo delle telline

e. Le venne in mente la mamma

f. le venne in mente il babbo

(37) a. non voleva mai uscire dall'acqua.

b. esci dall'acqua

c. Starò in acqua

d. prima di andare a letto

e. Una mattina scese sulla spiaggia

f. invece cadde in una conchiglia

g. Sarebbe stato bello restarci per sempre

h. Tornerò a terra,

i. Puntando i piedi e le mani riuscì ad aprire la conchiglia abbastanza per saltarne fuori e risalire a galla.

このように並べると、前置主語が動作主性をもっているのに比べて、後置主語が動作主性をも

たない「対象」であることがはっきりする。

同じ動詞 *venire* 「来る」でも、*il delfino venne a giocare* 「イルカが遊びに来た」(35c) と、*le venne in mente la mamma* 「お母さんのことが心に浮かんだ」では明らかに意味が異なる。

(36a-c) のように「鱈が生える」「時間が過ぎる」といった自然発生的な事象を表現する際に主語は後置されるといえるだろう。

したがって、非対格動詞の場合にかならずしも主語が動詞に後置されるわけでもなく、その動詞が用いられただけで、4「非対格」が生じるわけではないことがわかる。

主語が前置されるかその表示がない命令形や不定詞(37b, d, g, i)の場合は、そうした非対格構文の性質が浮かぶことはなく、3「非能格」と同じような自動詞として機能すると考えられる。

#### 4.2. 複合動詞形

文のなかで、ひとつの動詞ではなく複数の動詞、あるいは動詞に他の要素が付随している形を動詞の複合形と考える(注7参照)。ここでは深く掘り下げることはできないが、テキストのなかにある例をもとに考察を行う。

5「essere 文」は、主語に対して、名詞または形容詞が「コピュラ」*essere* で結ばれた文であり、類似した性質をもつ動詞を連結動詞 *verbi copulativi* と呼ぶことがある(38)。

- (38) a. *Era figlio di pescatori*  
 b. *- Ho visto, ma non sono sicura di saperlo fare.*  
 c. *Il ragazzo delle telline era già lontano.*  
 d. *diventerò un pesce.*

伝統的な文法は、これまで見てきた述定動詞による「動詞述語」*predicato verbale* に対して、コピュラと名詞(または形容詞)の部分を合わせて「名詞述語」と呼んでいた。

項概念は前者の「動詞述語」のみに適用されると考える研究者もいるが、「essere + 名詞(形容詞)」をひとつの複合形動詞と考えることも可能である<sup>6)</sup>。

こうした複合形動詞のなかで、これに近いものがある。述語動詞としての意味が薄れて、述定機能をもたずに、時制や人称を示す文法機能だけを担うようになった動詞、いわゆる「軽動詞」である。それが以下の *fare le capriole* 「とんぼ返りをする」、*prendere il largo* 「沖に出る」である。

- (39) a. *Ma poi ecco al suo posto comparire un delfino che faceva le capriole tra le onde*  
 b. *Dopo un po' il delfino, con un elegante colpo di coda, prese il largo.*

(38) と (39) の類似から、これらの名詞や形容詞に「項」概念があるとみなして、「fare / prendere / essere + 名詞 (または形容詞)」を、動詞の複合形と考えることはできそうである。

しかし、essere 文は、属性を与える機能のほかに、指示対象を特定する機能をもつ場合があることを考えると、すべてを一緒にすることはできないという指摘もなりたつ<sup>7)</sup>。

複合形には、2つの動詞が並ぶ場合、さらには動詞に副詞が付く場合がある。

- (40) a. - Ho visto, ma non sono sicura di saperlo fare.  
 b. il babbo, che proprio quella sera doveva arrivare dalla città,  
 c. per saltarne fuori e risalire a galla.

(40c) は、ne = della conchiglia であり、saltare fuori della conchiglia 「貝から外へ飛び出す」という点で、方向を示す副詞 fuori がついている。

## 5. 終わりに

本稿では、イタリア語の文章読解の補助となる基礎文型を提示することを試みた。まだ単文のレベルでしかないために複雑な文章を把握するまでにはいたらないが、基本的な3つの文（「他動詞」、 「非能格」、 「非対格」）の関係と、主語の前置・後置がそこに及ぼす影響を明らかにすることはできたと考える。

本稿の課題をいくつか挙げる。現段階では「essere 文」を別に扱うことにしたが、それでよいかどうかを再検討する。再帰代名詞を伴う動詞を、非対格動詞に属する中間態と、他動詞に属する再帰動詞とに明確に区別する基準を考える。さらに、受動態の si と非人称の si について理解しやすい形で説明を行うことが必要だろう。

こうして「核文」を土台とした骨組みを作りあげたのちに、それを拡張することによって、節と節との関係から文と文の関連性まで一貫した説明を行うことが最終的な目標である。

## 付録 Gianni Rodari - Alice casca in mare -

Una volta Alice Cascherina andò al mare, se ne innamorò e non voleva mai uscire dall'acqua.

- Alice, esci dall'acqua, - la chiamava la mamma.

- Subito, eccomi, - rispondeva Alice.

Invece pensava: - Starò in acqua fin che mi cresceranno le pinne e diventerò un pesce.

Di sera, prima di andare a letto, si guardava le spalle nello specchio, per vedere se le crescevano le pinne, o almeno qualche squama d'argento. Ma scopriva soltanto dei granelli di sabbia, se non si era fatta bene la doccia.

Una mattina scese sulla spiaggia più presto del solito e incontrò un ragazzo che raccoglieva ricci e

- telline. Era figlio di pescatori, e sulle cose di mare la sapeva lunga.
- Tu sai come si fa a diventare un pesce? - gli domandò Alice.
- Ti faccio vedere subito -, rispose il ragazzo.
- Posò su uno scoglio il fazzoletto con i ricci e le telline e si tuffò in mare. Passa un minuto, ne passano due, il ragazzo non tornava a galla. Ma poi ecco al suo posto comparire un delfino che faceva le capriole tra le onde e lanciava allegri zampilli nell'aria. Il delfino venne a giocare tra i piedi di Alice, ed essa non ne aveva la minima paura.
- Dopo un po' il delfino, con un elegante colpo di coda, prese il largo. Al suo posto riemerse il ragazzo delle telline e sorrise:
- Hai visto com'è facile?
- Ho visto, ma non sono sicura di saperlo fare.
- Provati.
- Alice si tuffò, desiderando ardentemente di diventare una stella marina, invece cadde in una conchiglia che stava sbadigliando, ma subito richiuse le valve, imprigionando Alice e tutti i suoi sogni.
- «Eccomi di nuovo nei guai», pensò la bimba. Ma che silenzio, che fresca pace, laggiù e là dentro. Sarebbe stato bello restarci per sempre, vivere sul fondo del mare come le sirene d'una volta. Alice sospirò. Le venne in mente la mamma, che la credeva ancora a letto; le venne in mente il babbo, che proprio quella sera doveva arrivare dalla città, perchè era sabato.
- Non posso lasciarli soli, mi vogliono troppo bene. Tornerò a terra, per questa volta.
- Puntando i piedi e le mani riuscì ad aprire la conchiglia abbastanza per saltarne fuori e risalire a galla. Il ragazzo delle telline era già lontano. Alice non raccontò mai a nessuno quello che le era capitato.

## bibliografia

- Gianni Rodari [1993], "Alice casca in mare", *Favole al telefono*, Einaudi
- 橋本勝雄 [2011], 「イタリア語複合時制における助動詞の選択と非対格動詞」 *Mare Nostrum XVIII* 地中海文化研究会報告第 18 号 (京都外国語大学国際平和研究所), 2011 年 12 月 31 日 pp. 1-12.
- Enc. [2010], AA.VV. *Enciclopedia dell'italiano*, UTET
- GGIC. [1988], Lorenzo Renzi, *Grande Grammatica Italiana di Consultazione*, volume 1, il Mulino
- GIA. [2010], Giampaolo Salvi e Lorenzo Renzi, *Grammatica dell'italiano antico*, 2 voll., il Mulino
- Elizabetta Ježek [2005], *Lessico: classi di parole, strutture, combinazioni*, il Mulino
- Michele Prandi e Cristina De Santis [2011], *Le regole e le scelte, Manuale di linguistica e di grammatica italiana, seconda edizione*, Utet
- Sabatini et al. [2011], Francesco Sabatini, Carmela Camodeca, Cristiana De Santis, *Sistema e testo: Dalla grammatica valenziale all'esperinza dei testi*, Loescher
- Salvi-Vanelli [2004], Giampaolo Salvi e Laura Vanelli, *Nuova grammatica italiana*, il Mulino
- Lucien Tesnière [1959], *Éléments de syntaxe structurale*, Klincksieck

## 注

- 1) 直説法: 現在 (amo, ami, ama, amiamo, amate, amano), 近過去 (ho amato, hai amato, ha amato, abbiamo amato, avete amato, hanno amato), 半過去 (amavo, amavi, amava, amavamo, amavate, amavano), 大過去 (avevo amato, avevi amato, aveva amato, avevamo amato, avevate

amato, avevano amato), 遠過去 (amai, amasti, amò, amammo, amaste, amarono), 前過去 (ebbi amato, avesti amato, ebbe amato, avemmo amato, aveste amato, ebbero amato), 未来 (amerò, amerai, amerà, ameremo, amerete, ameranno), 先立未来 (avrò amato, avrai amato, avrà amato, avremo amato, avrete amato, avranno amato), 接続法: 現在 (ami, ami, ami, amiamo, amiate, amino), 過去 (abbia amato, abbia amato, abbia amato, abbiamo amato, abbiate amato, abbiano amato), 半過去 (amassi, amassi, amasse, amassimo, amaste, amassero), 大過去 (avessi amato, avessi amato, avesse amato, avessimo amato, aveste amato, avessero amato) 条件法: 現在 (amerei, ameresti, amerebbe, ameremmo, amereste, amerebbero), 過去 (avrei amato, avresti amato, avrebbe amato, avremmo amato, avreste amato, avrebbero amato)

命令法 (ama, ami, amiamo, amate, amino)

不定詞: 現在 (amare), 過去 (avere amato), 現在 (amante), 過去 (amato)

ジェルンディオ: 現在 (amando), 過去 (avendo amato)

小学館『伊和中辞典』小学館, p. 1782 をもとに作成。

- 2) たとえば, 前者の立場をとるのは Sabatini e al., 後者の見方をとるのが Salvi-Vanelli である。
- 3) Salvi-Vanelli では動詞を, 他動詞 *transitivi* / 非他動詞 *non transitivi* に区分し, 非他動詞の下位区分として, 自動詞 *intransitivi* (本稿での非能格動詞) / 非対格動詞 *inaccusativi* と呼んでいる。非能格動詞 *inergativi* という表現は GIA., および Enc. に見られる。
- 4) *lavarsi* 「自らを洗う」や, *vedersi* 「自分を見る」のような, 本来の再帰動詞は, 実際には他動詞の性質を持っていると考えられる。実際, 古語ではこうした再帰動詞が補助動詞として *avere* を選択していたことが確認できる。[GIA: 122]
- 5) こうした複合動詞は, 動詞, 名詞, 形容詞, 代名詞 (小辞), 副詞など付け加わる要素の種類によって多岐にわたる。複合過去や受動態を作るもの (*avere, essere, venire, andare*) から, 法助動詞 (*potere, dovere, volere*), アスペクト動詞 (*stare per, cominciare a, finire di*), 使役動詞 (*fare, lasciare*), 知覚動詞 (*sentire, vedere*), 軽動詞 (*fare / dare / prendere SN*), *essere* を代表とする連結動詞 (*diventare*), 再帰動詞および代名動詞, 句動詞 (*mettere su*) などがある。
- 6) Ježek [2005: 114] は, 動詞述語に対してのみ, 項の考え方が適用できるとしている。
- 7) Salvi-Vanelli [61-66] は, 「対格文」(本稿での他動詞文と非能格を合わせたもの)と「非対格文」(本稿における「非対格」), 「*essere* を用いた文」の3つに大別する。

